

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

法学博士川崎武夫先生

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1978-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 慎吾, Kawai, S. メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2214

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



法学博士川崎武夫先生

河 合 慎 吾

川崎武夫先生に、はじめてお目にかかったのは、思いおこせば、今を去る33年の昔、昭和21年4月のある日、一面の焦土のなかに、わずかに大倉山公園の一角に焼残った市立図書館内に設けられていた神戸市教育文化研究所の一室であった。

お訪ねした目的は、この年3月、創立された市立外事専門学校が、第1回の入学試験を行うのについて、新制度によって“進学適性検査”なるものを併用せねばならない。しかし、長い間文化的には鎖国同様であった、敗戦直後の日本には、この種のテストの問題ひとつつくるにしても、参考にすべき資料すらない。幸い、ある人から、当時この研究所勤務であった菊池三郎氏（後の神戸市経済局長）が、英国留学中にこの方面の研究をつまれば、貴重な資料もお持ちだという紹介があったので、同氏に拝眉資料の提供と協力をお願いするためであった。はじめは「その任ではない」と固辞されていた菊池氏であったが、たまたま直属上司として同席されていた川崎所長の懇切なお口添えにより、快諾していただくことができ、おかげで私もその責を果すことができた次第である。これが私の先生との最初の出会いであった。

川崎先生にしてみれば、自ら設立計画に参画された生れたての外専のために、親身になって力をかしてやろうというお気持ちであったのであろう。その間の事情については、疎かった当時の私にも、先生の外専に対するなみなみならぬご厚情のほどが感じられ、心あたまる思いであった。当時、国民服や旧軍服姿の多いなかに、ひとり3つ揃いの背広に純白のワイシャツ、ネクタイをキチンと締めておられた若い日の先生の端正なお姿が、これを書いて

いると、懐しく昨日のこのように思い出される。

「筋をキチンと通しながら、情誼にはあくまで厚く、他人にも自分にも誠実な方」——というのが、失礼ながらその時の先生に対する私の第一印象であった。翌22年4月から、先生も外専に移られ、以来30余年にわたって同僚としてご交誼をいただくこととなったが、この第一印象は終始一貫して変わらない。いや、学園紛争など数々の事件をともに経験するにつれて、ますます強化されるものを感じる。これは延べ500名にも及ぶといわれる川崎ゼミの卒業生はじめ、親しく先生に接した多くの関係者の等しく抱く感想ではないかと思う。

外専・外大を通じて30余年のご在任中、研究所長、図書館長、学生部長、教務部長として、あるいは昭和44年の学園紛争に際しての大学改革委員会委員長として改革案のとりまとめ、さらには10数回にも及ぶ教員選考常任委員会委員長として人事問題の処理等々、先生が学園の発展のために尽力されたご功績の数々は、ここに私がこと新しく述べたてるまでもなく、万人の等しく認め、ことあるごとに、感謝の念を新たにするところであろう。

ことに、ご専攻の関係もあろうが、現在の外大の組織を支える諸規程のなかで、先生の関与参画されなかつたものは、ひとつもあるまい。ある人が先生を評して、「外大の生きたルール・ブックだ」といったというが、けだし適評であろう。先生もまた、その使命を自己に課して、誠実に実践しようと思われたのではないかと思う。

以上、思いつくままに、私的な感慨を書きつらねたが、このように考えれば、外大関係者で、直接間接に先生の恩恵に浴していないものは一人もないといっても過言ではあるまい。ことに、長期間にわたって、ことあるごとに先生のご庇護をいただいた私には、この感が強い。これが、私が外大論叢編集委員会から、この一文の執筆を求められたとき、その能力も資格もないこと、また他にいくらかでも適任者がおられることも、知りすぎるほど知りながら、懇望されるままに、あえて、おひきうけした所似である。

指定された紙面も尽きたようである。この種の文章では、当然、先生の「人」とともに「学問」にもふれねばなるまい。しかし、法哲学、民法、労働法にまたがる先生の壮大な学問体系について、門外漢の私が、何かを言おうとすることは、それこそ非礼というものであろう。今はただ、定年制の故をもって、このすぐれた研究者、誠実な教育者を本学から失うことを愛惜するのみである。

「一身にして二世を兼ねる」とは、その生涯の半ばにおいて、明治維新を経験した福沢諭吉の言葉であるが、先生が麗筆をもって描かれた『わが時代の心象』に見るように、齢33才にして、終戦を迎えられた先生もまた、「一身にして二世を兼ね」られたといえようか。ここにその一端がうかぶえるような、先生のユニークな人間形成過程、ことに、田辺元、恒藤恭、末川博などの碩学を師とし、終生の友となった文化勲章の井上靖氏などにもすごされた充実した学生生活、さらには豊富な海外での研究生活体験などが、この度のご退官によって得られた時間的な余裕と相俟って、みごとな川崎法学の体系が構築される日の一日も早からんことを祈ってやまない。

願わくば、先生の今後のご研究とご健康の上に、より一層の栄えあらんことを――。(79・3・3)